

[林の中]	
	静香は「はー」とため息をついて、座り込みました。
静香	「この林に住んでいる動物はいないみたいだなあ。長い時間歩き回って見たけれど、カラスやスズメ以外には何もいないなんて。カラスやスズメなんか数には入らない。庭にもいたし、学校の近くにもいる。学校の宿題のために、せっかくならもっと特別な生き物に出会いたいなあ」
先生	「学校か家の近くの場所を選んで、そこに何が住んでいるか調べなさい。そこで見つけた珍しいもの、面白かったことを作文にまとめなさい。」
	それが宿題でした。
静香	「 の家みたいにペット・ショップの近所に住んでないなんて、ついてない。そうすれば、いくらでも書くことがあったのに。」
	でも、彼女が選んだのは、遊び場の裏の小さな林でした。そこにはたくさんの動物たちがいると思っていたのですが...
静香	「さて、どうする」
	彼女は悩みました。目をつむって、考えていると...
トガチュウ	「で、君はこの森に興味深いものは何もないと言うんだね？」
	とかん高い声が聞こえてきました。
静香	「なに、今の？」
	静香は息をとめて、あたりを見まわしました。みつけたのは、落ち葉の下からとがった鼻をつきだしている、目が小さくてひげが長い、毛がふわふわした小さな生き物。その生き物は、また同じ質問を繰り返しました。
トガチュウ	「で、君はこの森に興味深いものは何もないと言うんだね？」
静香	「そうね、ないと思う。あなたはだあれ？」
	と静香はたずねました。
トガチュウ	「みんなはトガチュウと呼ぶよ。僕はトガリネズミのトガチュウさ。さ、指を背中みて。」
静香	「なんですって？」
トガチュウ	「なあ、この森に何が住んでいるのか知りたいんだろう。おいでよ。急いで。」
	言われるままに、ゆっくりと静香はトガリネズミの背中に指をのばし、そっと触ってみました。すると、彼女はトガチュウの隣にいて、ちょうど目の高さでのぞきこんでいました。しかも、彼女は四本足になって、毛で覆われていたのです。彼女はトガリネズミになっていました。
トガチュウ	「うん、良くなったね。」
	とトガチュウは言いました。
トガチュウ	「ついてきて」

静香	「どこへ行くの？」
	静香はたずねました。
トガチュウ	「このあたりの生き物たちは、君が自分たちがいることに気づかないのにショックをうけていてね。会わせてくれと、頼まれたんだ。でも君は、森を案内するために僕と同じサイズになったから、ほかの生き物の餌にされちゃうかもしれない。僕と一緒にいた方が安全だよ。」
	と云いなり、出て来た穴にさっと滑り込みました。静香はどうかと迷いましたが、上を見あげると、大きな鳥が空からこちらを見えています。彼女は急いで、トガチュウの後に続いて穴に飛び込みました。
[土の中]	
	土の中は暗くて、湿っぽく、どこにでも根っこがはっていました。小さい根が絶えず、彼女の顔に当たります。彼女とトガチュウは、大きな根にあたるとよじのぼり、はいずり、回りこまなければなりません。何度も何度も。突然、トガチュウが止まりました。
トガチュウ	「おーい、みんな。来たよー」
	彼は土のトンネルに呼びかけました。最初、静香には何も見えず、何も聞こえませんでした。けれども、暗いトンネルの向こうから、ごーごーという音が聞こえ、どんどん大きくなっていきます。とうとう、トンネルの壁から生き物が飛び出してきました。ミミズに、甲虫、白っぽいウジ虫、その他たくさんの静香が知らない生き物たちが、次から次へと現れました。
静香	「あなたたちみんなが、土の中に住んでいるのですか？」
ミミズ	「ああ、うん。これだけじゃなくて、もっといるがね。」
	と、ある太ったミミズが言いました。
静香	「でも、どうやって暮らしているんですか？つまり、あの、ここで何を食べているんですか？」
ミミズ	「そうだね、わしは進みながら土を食べていると言えるかな」
	とミミズは答えました。
ミミズ	「土を食べてトンネルをつくり、それから土の中の植物やその他の食べ物を分けるのさ。誰にでもってわけじゃないけど、わたしは大好きだね。」
ウジ虫	「僕は直接、根から汁を吸います」
	とシロっぽいウジ虫は答えます。
ウジ虫	「そして、その日が来たら地上に出て大人になるんだよ」
甲虫	「森で死んでしまった動物に、何が起こるか不思議に思ったことはない？」
	黒い甲虫が、触角をうかしながら、さえぎりました。
甲虫	「わたしが、ちゃんと始末をつけているのよ。つまり、わたしたちが死んじゃった動物をたべるおかげで、森は綺麗なの」
	静香がみんなから言われたことを考えている間、トガチュウは土の生き物たちみんなにお礼を言っていました。そして、静香に向かって言いました。
トガチュウ	「ついて来て。まだまだ見るものがあるから」

--	--

[なんて腐りきった場所]	
	静香はトガチュウと地上に出て、落ち葉の下を走りました。落ち葉はガサガサ、ゴソゴソと音がしました。そこにはクモやムカデなどの生き物がいます。トガチュウと静香は倒れた木のところまできて上に上りました。倒れた木の上は緑色をしたコケで厚く覆われています。
静香	「うわぁー、なんてやわらかいんだろう」
	静香は叫びました。
静香	「しかも、コケ以外にもたくさんの植物や生き物があるなんて。」
	静香は倒れた木の上を走り回りました。柔らかいコケにくるまったり、倒れた木の上で育っているオレンジ色のきのこ(真菌類)のにおいをかいだり、高く伸びて赤い色をしたコケ(地衣類)の匂いをかいで回ったりしました。わずか10センチほどの木の芽も見つけました。
トガチュウ	「この木の中を見たいかい？」
	とトガチュウはたずねました。
静香	「もちろん」
	と、静香は答えました。
トガチュウ	「やす子」
	と、トガチュウが叫ぶと、倒れた木から何本もの足のある生き物が出てきました。
トガチュウ	「ヤスデのやす子だよ。これから先の旅には僕は大きすぎるから、やす子と一緒にいって。僕は、ここで待っているから。」
静香	「でもわたしもトガチュウと同じ大きさじゃない！」
	と、静香は言いました。そのとき、やす子が後ろから近づいてきて、静香の頭に触れました。前と同じように、一瞬光って、静香はやす子のようなヤスデになっていました。やす子は静香の前を歩いて言いました。
やす子	「さぁ、行きましょう」
	静香は少し困って、
静香	「こんなにたくさんの足を動かすのは大変だわ」

	と言いましたが、
やす子	「大丈夫、大丈夫」
	とやす子は静香を連れて倒れた木に入っていました。やす子は、いろいろなものを指差して教えてくれて、静香はそれらを見ているうちに、足をどう動かすかなんてちっとも考えなくなっていました。
やす子	「ここでは、生き物たちが木をガリガリ噛んだり、穴を開けたりと様々な作業をしているのよ」
静香	「へ～。まるで大きな工場みたい。木を土に変えている工場ね」
	静香たちは、ゴキブリ、小さなシロアリ、横を歩くとくるくる丸まってしまうダンゴムシなどに会いました。倒れた木の奥で休もうとしたときなどは、そこにトカゲがいました。
静香	「たった一本の倒れた木の中で、こんなにも多くのことが行われているなんて思ってもみなかった。何も知らなかったことを謝らなくちゃ」
	やす子は静香にほほえみ、トガチュウのもとへ静香を連れて行きました。
やす子	「またね、静香」
	やす子はそう言うと静香をトガリネズミに戻しました。そして、トガチュウと静香はちょこちょこ走って行きました。
[てっぺんの生き物]	
	静香とトガチュウは木の根元に着きました。すると頭が黒い鳥が地面に降りてきました。
カラ子	「こないのかと思い始めていたのよ。静香！わたしはカラ子。飛びたいと思ったことはある？」
	カラ子がそう聞きながら、静香に羽を伸ばして触れるとまた光って、静香はカラ子と同じようなシジュウカラになっていました。 その日の体験の中でも、飛ぶことは最高の出来事でした。木のとっぺんを超えて飛んでいくと、多くの鳥たちが葉の間から出入りするのが見えます。二人は、ある木のとっぺんに降りて行き、枝の間を飛び回たりもしました。
静香	「わぁ、木の葉のバッタみたいな虫がいっぱいいる！キバチやハエも飛び回っているわ」
	静香がそう言うと、
カラ子	「葉の上にはくねくねと歩いている毛虫もたくさんいるわよ」
	とカラ子が教えました。カラ子は羽ばたきながら、幹の上から下までを見せてくれました。静香はそれを驚きながらついて行きました。木の表面では毛虫やアリがうごめき、樹皮と同じ色をしたクモやガもいました。
静香	「虫たちはカモフラージュしているのね。樹皮と同じ色をしているから見逃すところだった」
	樹皮には薄緑色をしたコケも成長しています。二人は幹の根本につきました。静香は、そこに待っていたトガチュウの隣りに飛んでいき、言いました。
静香	「この木はまるでアパートみたい。てっぺんの葉のところから、ずうーっと根元のここまで、たくさんの生き物が住んでいるんだね。」

カラ子	「あなたが木の中や周りに生きている生き物について、そう言ってくれるのはうれしいわ」
	静香はつづけて言いました。
静香	「でも、私は土の中に戻らなきゃ。だって、土の中のみんなのことが忘れられないもの」
	それを聞いたカラ子は静香の頭をなでて静香をトガリネズミに戻し、去って行きました。
[お帰りなさい]	
	静香はトガチュウが案内するままに、地下へ入って行きました。
静香	「次はどこへ行くのかな。」
	トンネルの中は相変わらず暗く、湿っていました。ひげ根が彼女の頬に触れます。走っていくうちに土のおいが鼻いっぱい広がって...
	静香はぱっと目を覚ましました。気づくと最初に座っていた幹の横にいます。どうやら、地面の上で眠ってしまっていたようです。鼻には落ち葉と土のおいがつまっています。 静香は起き上って、
静香	「あれはすべて夢だったの？」
	と思いながら、周りを見回し、立ち上がりながら言いました。
静香	「あそこの倒木は、私とトガチュウが訪ねたのに似ているし、この木の樹皮は私がカラ子と一緒に見てきたのと同じ生き物でいっぱいね。」
	でも、あの冒険が現実だとは思えません。ふと、近くの地面をみると、見覚えのある場所がみつけられました。気をつけながら落ち葉をどけると、そこには土の中へと続く小さな穴。静香は思わず大声で笑いだしました。
静香	「やったぁ、これで作文に書くことがたくさんできたー。」
	静香はそう言うと、身をひるがえして、家まで走って帰って行きました。
Fin	